

pensoj flugas trans la land - limon

Senryu Zasshi

麻生路郎 ☆ 主筆



清平

昭和廿二年七月一日
創刊三週年紀念
發行部 東京市
西區新大塚七丁目

每月一圓二日發行
創刊大正十三年
通卷二百六十七號

八月號

No.267

川柳の雅証

濁世放言

日本人の多くはほん
トの政治意識を持たな
い。なまじいことに
は税金でやぐんで、共
産党にすがり度であ
る。従つて政治家もヤ
クザで、政治の西と東
がテンデ判らない。所
謂人民のための政治と
云うのも口頭禪でしか
ない。

過日もある人の話に、金を
バラ撒いて当選した九州のあ
る代議士が、上京中、郷里の
PTAの会長に推薦された電
報を手にしたので、その席に
居合はした人達へ、早速、「私

は今回郷里でPTAの会長におさ
れた」とトク／＼として披露した
そである。私は斯んな代議士を
国会へ登つた人たちの顔が見たい
と思つた。又ある人は云つた。参
議院議員に根本先生と云うのがあ
る。この先生から名刺を貰つた人
が名刺を見ると、姓が違つてい
るので、他の人にその説明を聞く
斯うである。

根本先生と云うのはその参議院
議員の愛称であつて、この愛称が
ついた原因はある席で（真選議會
ではあるまい）挨拶をした時に、
根本的と云う文句を三回も三回も
ねもとの／＼と云つたんだそう
だ。幾ら他人に書いて貰つた原稿を

読み上げたにしてもあまりにもナ
ンセンスすぎる。参議院と云うと
ころにはこんな議員と山本有三氏
あたりが議席を同僚としてゐるこ
とを人民は牢記しなければならぬ
そしてそんな議員が議院で山本有
三氏等よりも勢力を持つことがあ
りうることを思うと全くてんやわ
んやである。

こんな政治家によつて議せられ
る政治であるから、右が左になる
ことも、天が地になることも、人
民も甘受しなければならぬ
のである。

日本の近ごろの政治家が、一体
にダメな原因が何処にあるかと云
うと、彼等にはテンデ詩が無い

らである。詩人には理想があるが
彼等には野心があるばかりである
彼等の野心は利権や名譽慾となつ
て飛躍することはあつても、人民
のための良き政治を実現させよう
とする良心はサケラも持合はさな
いのである。詩人も議席を持つ英
國あたりの政治家と全然粒が違つ
てゐる事がうなづけるのである。

この意味から私に今後政治界
へ、衣服の清潔を以てしてでも詩人
を送りつけまい念願を持つてゐる
詩人も徒らに高踏的であつたり
諷刺に墮したりしては不可である
世界の平和は詩人の熱誠によつ
てのみ淨化し得るものであること
を認識しなければならぬ。（路）



大問題小問題

福田 山雨楼

御意見番大久保彦左衛門は
「上様天下の一大事で御座り
ます」とと触込んで忠言を
怠らなかつたのであるが、そ
の割に大した問題でもない場
合が多かつたようである。今
柳壇を見渡してきて何が一番
の大問題であるかと云えば、
格別これと云つて取立てるこ
ともなさそうである。では問
題はないのかと聞かれると決

してないわけではない。一寸
頭に浮んだだけでも、川柳界
が低調であること、よい柳誌
や著書が少いこと、俳句と川
柳の交流、柳誌合併問題、川柳
非詩論、新人の輩出不足、縣
人句集発行の傾向、面白い句
や新感覚句の少いこと、新地
帯開拓のこと、ジャーナリズ
ムへの進出運動、教育方面へ
の啓蒙、選者公認論、藝術

論、古川柳輕視と再確認の問
題、古句研究の貧困等々が数
え上げられる。どれを一つ取
上げて見ても小問題として拾
て去ることはできない。何れ
も柳壇の深い関心を要求して
いる重要條件である。安易な
中に案外問題を孕んでゐるの
が偽らぬ姿であらう。

更に思いを深く沈潜して見
ると、この中でも当面した大

問題が横たわつてゐることに
氣付く。それはよい柳誌のこ
とだと思ふ。今日（六
月二十六日）図らずも懷窓、
雨垂雨兄の御見舞を受け、照
談してこの問題を論じたので
あるが、実に大柳誌——と云
うより内容の充実した柳誌——
の出現こそは、何よりも先行
的、基礎的な営みでなければ
ならぬ。土俵がありブルが
ありグラウンドがあつてこそ
よい試合よい記録が生れるよ
うに、先ずよい柳誌が約束さ
れ緊密化されてこそ、柳人の
飛躍活動が期待できるのであ
る。しかも今日の出版事情は
極度の困難と悪條件に囲まれ
てゐるのである。例を本誌に

取ることば聊か面はゆいが、
『川柳雑誌』通卷二百六十四
号の苦闘は決して生やさしい
ものではないので、主幹路郎
先生が御一家を総動員されて
の超人的努力と、先生をめぐ
る幾多柳友の涙ぐましい力添
えによつて、眞に血と汗の
結晶によつて築き上げられ
たのである。このことは自分
が大坂にあつた頃親しくこの
眼で見、この足で学び取つた
嚴たる事実である。

・ 頃日橋本緑雨兄が大坂市電
動船通三十八年を機会に勇退
されたので、自分は兄の功績
を讃え、『川柳大阪』に一文
を草したのであるが、願れば
緑雨兄は本誌のために地球を

大阪そごう

そごう卸商品館	そごう梅田食品市場
十合商事株式会社	そごうアベノ店
そごう灘波店	そごう更生デポー

一廻りも二廻りも駆けめぐつたほど、足を仇に歩き廻り乗り廻つてゐるのである。路郎先生が過去四十数年間川柳のため『川柳雑誌』のために東奔西走された道程は、縁雨兄のそれに更に輪をかけたものとなるであらう。『川柳雑誌』は戦争中及び戦後を通じ一、二年間眞に己むを得ない事情のため休刊した外は月刊を断行し、柳壇に一エボツクを画したことは著名な事実であつて、今日の如き強固な基礎が打樹てられたことは決して偶然ではないのである。しかし今日の出版経営の困難さは到底筆紙に盡し難いところであつて、われわれは石に嚙りついてもこれを打開し推進しなければならぬ。それほど機関誌の発行は重大である。特に本誌の如く多年の傳統を誇り対社会的、柳壇的に幾多の使命を果しつつある公器性に鑑み、この雑誌をよりよくし、優秀なる作品と研究評論とが提供されることを牢記しなければならぬ。

戦後出版界の混乱は今日そ

の極に達し、俗悪に墮ち、卑劣なる図書雑誌には眼を覆わしむるものが少くないが、わが川柳界にそう云うグレシラムの法則を許容してはならない川柳家はあくまでよい雑誌擁護の立場に立つて協力しなければならぬ。このことこそ所謂大問題であることに氣付くべきである。由來眞面目なものの、眞剣なものほど大衆愛好のパロメーターは低いのである。低級な万歳などがよろこばれる心理を考へるとき、確かに拭い難き矛盾はあるが心ある川柳家はあくまで眞面目の味方となつて俗悪と闘わねばならぬ。味方の本壘を堅く守り城を固めるためにわれわれは結束し提携しなければならぬ。主張や作句傾向の同調なるものはこの際合同糾合して團結すべきである。あらゆる角度から経営の合理化を図るべきである。

かつてわれらの良識蘇峯翁は『大新聞』とは大問題を扱うものである、小新聞とはつまらぬ問題をかつき出すもの

也』と教えられたが、大柳誌の面目も亦此処にあらねばならぬ。詩に非ざる川柳の横行するを見て川柳非詩論をかつぎ出すが如きは逆説の尤なるものであり、かるが故に川柳の詩的向上に眞剣を致すは問題に忠なる所以であらう。選者公認問題の如きも深甚なる考慮を要することであるが、これを單に資格檢定的意味で処理することは実行上至難であるのみでなく、よき選者を増やす結果とはならないであらう。問題はあくまで選者の良心的、全身的な選句態度にかかるところであり、選の結果に対して一般が注視を怠らぬことこそ肝要なのである。万句合の昔は入花料や景物などの關係もあつて投句者の判者に対する関心が鋭敏であつた。その結果最も優れた初代川柳の選句に衆望が集つたことは当然であるが、問題はそれのことよりも選句の嚴正さ卓拔さが更によりよき句の誕生を招いた点にある。選者も亦長い目で選ばれるものである

ことを牢記して、選句の重き責任を担うべきである。芭蕉の選句が嚴しかつたことは文献が語り傳へてゐる。虚子の選句振りの眞學さは横須賀線の車窓でよく見受けたところである。わが路郎先生の選句も亦峻嚴さを失うものではない。最近「窓口」で語られたとおりである。自分らも二十年来先生に習作を見ていただいてゐるが、師の鞭のきびしさに且つ畏れ且つ敬するものである。先生の投稿に対するセレクトもけいけいとして人を射るものがある。齒を食ひしばつて幾度か書き直して初めて採用されたときのうれしさは未だに忘れることはできない。こうした慈父の愛のこもつた鞭、諸曲小袖會我にある「打たれても親のむち」こそ川柳の前進と成長を助けるものである。そう云う眞剣さの中に実は大問題が培養されてゆくのだと思う。

何と云つても川柳

には十七音字の制約がある。作品をみがくためにはどうしても表現の技を練らなくてはならぬ。いくらよい着想や感激に会つてもこれにテクニツクが伴わねばあら玉に終つてしまふ。あら玉に磨きをかけるには師も必要であり、競争相手もいる。また吟社の是も機関紙のスペースも入用である。かくして話は還元してよき柳誌の刊行にかかつてくる。この重荷は川柳家の誰もが支拂わねばならぬ日常の負担であり、光榮ある義務である。

本社句会

九月三日(土)午後六時

大阪市南区段谷仲之町六八

大宝文化会館

兼題「柳」「昔」「父」

味覚の代名詞 吉野川鮎狩

遊船料 (一日に付)
12人乗 ¥4,900
20人乗 ¥5,400
(船夫・漁夫・船付)

9月末日まで

★御申込は
近鉄天王寺営業課
近鉄交通社各案内所

近畿日本鉄道





麻生路郎

汽車賃を云うて農家へ近づかず

三本松にて

脱穀機下ドドドツと音が落ちる

諸なんかなど敬遠されはじめ

二百十日二百二十日と神だのみ

他殺やろうと云い／＼たばこすいつけた

○

大阪市 武部香林

体操の代りに蒲團たゝむなり

悲しみ多しダンサーの首飾り

名を揚げる寄附か苦笑で出す寄附か

若鮎の如くスカートの翻し

料飲再開

欲しくないものを女給にあてがわれ

奥様になつたらと女給ぬけめなし

甘そうな男の膝へ女給掛け

ソ聯引揚

友の遺骨へさあ舞鶴だ舞鶴だ

横浜市 福田山雨楼

終点でねてゝ婦人に起される

はるかなり妻は柘榴を庭に植え

整理組衛の陽を避けさまよえり

くびはもう明日に迫る空模様

見渡せば電車で己れが歳がしら

池田市 戸田古方

霞吸うて生きてる人につきあえず

よつぽど暇な人やな

石だけやないかに竜安寺あきれ
港風景荷馬車の馬も一寸描き

布哇 内藤草一郎

仲直り女將の目クやつぱりねー

一くさり弾いて次ぎ／＼貰われる

膝枕下から鼻の穴を見る

三味線は袋のまゝに四疊半

醒醐味も知らず若後家ミシン踏み

父の名を明かさず母は世を終り

ふと会へばものも云へない連れがあり

送話器を押へてどうしたものかいな

呑み好きの友達ばかり夫持ち

尼崎市 水谷鮎美

サラーリを頂くほどの父の老

科学に克つた一自殺してゐる

おちついて色よき返事唐辛子

ワイシャツで鏡に佇つた主事六級

兎の子予算されてるとは知らず

奈良縣 西垣錦風

轉業の一步釘樽ころこばし

値下断行妻はなんでも欲しい顔

易者から聞いた通りに落ちて行く

山口縣 岡村路三

よるべなき身は有楽町をさまよいぬ

衣替へ喧嘩の鍵がコロリ出る

東京都 川村好郎

うらやまし自論通してゆく若さ

値切られて飲ませてやつと約手なり

それが君そも／＼赤の思想だよ

平塚市 木村孤浪

古橋は見合の写真別にこり

あきらめて地ばひと南風さめる也

螺線丈け書いて見せてるボールペン

話みなブルの土曜の熱海のき

スクーター柳を小鮎のやうに縫ひ

大牟田市 高田抱逸

貧すればいつか野生の顔になり

半分は拂う氣紛失詫びに来る

新婚の蚊帳を縞蚊はめぐるだけ

あの頃は面白かつたストライキ

大阪市 市場没食子

姉さんと呼びたいような二度の母

花便り和裁の妻の手が抜けず

電話では話せないわと誘ひの手

血痰へ年はとつてもあわてたり

主任とはかくも休まぬものかいな

唇をかつて許せし人に会い

産院制限どころかうちは子を貰ひ

箸まめなあなたがヒスにしてくれた

暮しにくいと言ひ／＼犬も猫も飼ひ

口應へどうやら子にも見くびられ

結納もすんだ二人で宝塚

名古屋市 吉田水車

ロングならロングもよろし娘のかいしよ

おくれじとするか老妓の厚化粧

鶴の自由お前もやはり紐つきか

御亭主の方は下駄ばきお供する

投げ賣の鍋は満身創痍なり

大阪市 須崎豆秋

日曜だ今日は袍を提げずに出

表口あけたが呑みに来てくれず

三越の旗はむかしのまゝなびき

なにやらが欲しい水でも呑んで寝る

なんさんの花へちよこんと夜が明けた

蝶高く／＼二階の屋根越した

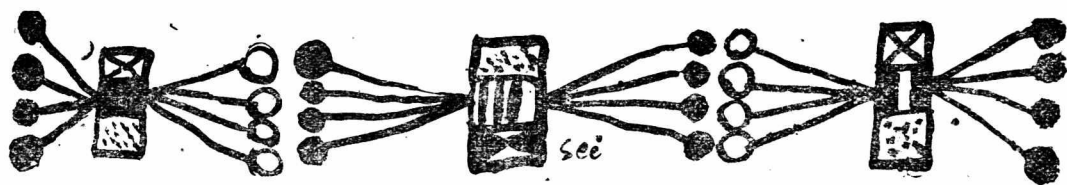
たれもいぬので天井へ馬鹿野郎

大阪市 正本水客

夜行までの時間を駅雨みてる

バスぢり／＼このばれば青葉窓に手に

泥つけた顔でどじようを分けている



雞小屋をつくる鋸釘の音

先代の好みと別な軸もあり

大阪時間父もだん／＼年をとり

神戸市 竹内 潮花

鐘掛け寂しや春の陽に焼けて

二等車の窓二等車の風が吹き

氣違の眞似して見たい日もありぬ

しつけ糸別れたひとの縫ふたまゝ

奈良縣 尾崎 方正

綠蔭はテニスの汗の拭くところ

乱れたる世相警官駅に立ち

もの憂げに納屋で牛啼く田舎道

大阪市 清水 白柳子

次男明出生翌日死亡

南無阿彌陀在世四十一時間

医者産婆もう葬式を打合せ

祖母曾祖母じつかり抱いてやつておくれ

大阪市 木下 幽王

貨車満載一休金はどこにある

みんな生てる闘つてる夏の菜園

値下げ／＼さあみろ俺は病人

金魚鉢われて金魚の歴史閉す

大阪市 水谷 竹莊

逢うところも別れるところも難波駅

むつつりと出番待つてる舞台裏

妻であることをかくした女事務

逢ひに行く途で不粹な友に会ひ

落ぶれた旦那二号にたすけられ

廣島縣 弘津 柳慶

春すしの切るまで待てぬ子沢山

寝姿のあまりにやつれた父を見る

専賣公社となる

大阪市 稻葉 鳩花

信じるがゆえに恋をもすてたのに

荒れてゐる放國の土をふみしめて

下関市 國弘 半休

首にした男の首も整理され

どしや降りも汽車が遅れたゞけで無事

コスモスの腰が折れてる咲いて居る

思ひきり賣らしてさつと取締り

八代市 佐野 ト古

大過なき此処らあたりで辭職せん

都合悪き時は責任取れと云ひ

にくまれ役押付られて年が経ち

兵庫縣 小沢 史葉

春かすみ鐵も一息入れて立ち

バイヤーの眼にアロハシャツちぐはぐな

兵庫縣 小西 無鬼

農村の此処にもリーダーズダイジェスト

腹の立つ事も家相の勢にする

むつつりと居れば吾が子の氣をつかひ

新中になれば時計を早さがみ

ブン／＼時計に念を押されて飛んで出た

大阪市 吉田 斜水

三ツ揃着れば着たどて冷かさ

腕力も新憲法におさへられ

愛情は降る星の如それで瘦せ

親切にすればするとと警戒し

こゝだけの話だつせと又喋り

布施市 糸本 醉月

飲料再開いつたい誰が飲めまね

梅雨しきりでん／＼虫と話する

ガニ股が足へ自信の半ズボン

奈良縣 白牛 奇朗

藥專の帽子乙女は胸を張り

洋傘の紐が眞面目を思わせる

住信貴山上

ほととぎす啼く朝からの胡瓜もみ

岡山縣 山分 北路

子の便りダンス上手と書いてなし

麦秋の病氣何だか済まぬよう

母らしい足音で来る枕がや

清貧を洋裁習いたい娘

流行え女の知性他愛なく

四十年この詰襟さ着古して

辻易者さり残されし者の影

お土産の値段へ子供驚かす

恋と言ふ字を書く文の日記帳

東京都 山根 白星

嫁き遅れて好きなグノーの夜の調べ

父さんの母さんだけにない土産

みな悪夢でしさと処女でない日なり

戦死した父を世間はもう言はず

もの忘れ易い母にしてハバロス

会へば只うつむくだけの君なりし

まな板に妻は不平の音を立て

大阪市 渡辺 孫拙

夕涼み月も一所におつてくれ

蓮の葉を乱して夕立すぎてゆく

遠囃子うちもの不景氣にかゝる

豪華船の料理へ庶民腹が立つ

奈良縣 西辻 竹青

超過勤務はしたけど金が無いと言う

トンネルの数も話でよみ忘れ

遠足のリズムに乗つた砂利の道

子を連れて出て大阪で疲れ果て

新縁を無口でぬける二人連れ

京都府 間島 青丹子



子育てに鏡みぬ日の多かりし
鮑府まで流れる汗にぬれてゐる
税金に追はれどほしの汗をふき
大阪市 上田 春柳

布施市 森下 愛論

ビール栓快よく飛ぶ夏が来た
青春は椅子きしませてよく語り
金あれば儲かる話飲む話
おとなしいだけがとりえと妻も言ひ
ありふれた結婚をして子をふやし
大阪市 太田 良子

配給の酒に少うし足して呑み
飲みたい頃患者が一木下げてくる
酒飲んで酔うたところも見せておき
酔ざめの水用意する妻となり
おいそれと引受けて来て叱られる
貰うのか貰うのか派手に住んでゐる
尼崎市 静岡 忠八

眞実になんとすれば誤解され
安定はいつの事やら子を育て
子の寝顔体温計はもう要らず
孝行の思ひ出もなく父母もなく
子の爲に生きて居るとは哀れなり
大阪市 松江 梅里

苦勞人と云はれた見栄に慾を捨て
藝妓すりやこそ大臣も抓ねられる
ピツタリと来ない藝妓のハイヒール
大阪市 伊藤 藤定美
嘘ばかり綺麗に書けて男ある
月見草恋の痛みにふれて咲く
絵になつて見て立膝も美しく

ゴシップに負けて女のあわれなる

岡山縣 丸山弓削平

人身御供のように嫁つたが尻に敷き
イヴニングでかまきり様の御入來
役に立つて看護婦上りと蔑まれ
アメリカの文化に触れるボールペン
指を褒め合うて火鉢の初な恋
豆腐もつ手に生活の刃が触れる
岡山縣 直原七面山

生活が櫻の花も見せず
肉体を張つた女の凄じさ
青年の世界だ俺は覗くまい
昇給の邪魔になつてゐる正義感
ブラトニックえ女の方がちれてゐる
道路から見易い場所へ倉を建て
一年目やつともらつたキツスなり
妻死ねばと思つた事も二度三度
本妻の子供も通ふ二号邸
宇都市 上林 粗影

いきゝかの艶聞を開流す美容師
風吹けば吹いたで困る我が暮し
ガード下田村文学を否定せず
人妻の匂ひ吊皮を持ち直し
移り氣でなく又パイプ欲しくなり
別府の話は人混みの中です
姫路市 狩野 燕子

ビルの窓顔々々の夏祭
引揚者蚊帳の匂をかいで見
こんべきの水ウラジオ迄も続くの

金沢市 安川久留美

鍵の病院別の世界と諦める
蚊のむくろ扇はよべのまゝたゝむ
向日葵の陽に反いたは死ぬ妻
松山市 前田 伍健

街録の判りましたで打ちきらせ
ヒロポンと知らず母親使する
教養は制服着ても着ないでも
行合へば御苦勞さまと村平和
くじを買ふ我れをあわれむ我れのあり
ありあまる金でないのにウキスキー
大阪市 橋本 緑雨

税金のことで内閣うらむなり
しかたがない娘にされて勤めて居
枕一つひろくとした蚊帳の中
大ジョッキどちらが強い夫婦なり
静岡縣 富士野 鞍馬

弁当を遅れて食べて誇りあり
面白い人とはいはれて恋はなし
結婚をしてから海もひとのもの

胃酸過多

胃痛・胃潰瘍に

ノルモザン錠

45錠入



大阪・武田薬品工業株式会社

郎路生麻

一年季をいれよ

れんき。をいれると云う言葉があるが、相當に年季をいれたものといれぬものとは、こゝと云うところで味がちがう。川柳を作る人も、二年や三年やつて、一ト角の作家になつた積りでいる人と、十年も二十年も年季をいれていて、

どうも川柳はむづかしいですなア
とながけている人とは、その句
に格段の相違がある。尤も時間的
に十年二十年の作家の句が、二
年や三年の作家の句よりも拙つ
合がないこともない。そんな人
は大てい句を安易に作り過ぎて
人であつたり、川柳を交際の具
と心得たりする人に多い。しか
そんな人でも、ねんきをいれた
め、良さはどこかにあらはれる
のであるが、ねんきをいれたた
に生じた悪い方面が特に目立
ために認められぬのである。

何れにしても、よい作家にな
には、作句に、謙虚でなければ
ない。物に対して常に驚く心
失はないことが要求せられる。
虚は研究心を生み、物に驚く心

新しい発見をするからである。そこに年季をいれた作家の句が、平易な十七音字をならべているのうように見える。ごつかに底光りのついた句、味の深い句、匂いの高い句となつて人の胸奥に沁込んで行つたとしても何等不思議はないのである。

ねんきをいれると云うことによつての効果は、鑿に鑿出をするることかも知れない。庭石になめらかな青苔を生じさせることも、知れない。すくなくとも、錫や銀に金メッキをすることではない。鑿に鑿を出して見たところで、石に青苔を生じさせたとところで、それは單に東洋趣味であつて詰らないと云つてしまえばそれまでである。いかゞ私は年季をいれることと

の効果を驚嘆に艶出しをすることよりも、石に青苔を生じさせるものとより、より以上價值あるものとして推獎しないのである。艶出しも、青苔も、それは要するに一種の老人趣味だと誤解する人があるかも知れぬ。そして一方では新しい句を作れと云つて居りながら、一方では艶出しや、青苔を賞揚するような云い方をするのは矛盾も甚だしいと思うかも知れない。しかし、艶出し以上、青苔以上の價値ある句を、年季をいれることによつての効果を生み出さなくてもいい。又生み出せぬものだともう私は見做し、老人趣味でもなければ、矛盾でもない。故人の多きがそこまで行つてはじめて生命ある句を作つてゐるからである。

送放抗对柳川 國縣四四

健 伍 田 前 事記と絵

松山中央放送局の全國にない企劃で、川柳角力、四國四縣對抗放送をほこめて居る。行司は伍健、高知は徳島へ、高松は松山へ出向して二元放送に依る角力である。川柳本質には反するが、普及には効果上々で、川柳人は勿論一般からも大好評をうけて、放送局も大に乘氣になつて居る。ヤグラ太鼓入角力場の音響、音楽で開場、一分間角、一分間判定、その間を秒針がコチ／＼刻む、スリルなぞで、題は一般から募集、その日その時発表、懸賞付で、人氣を呼んで居る。行司はなか／＼難儀な役で判定と譴評を一分間やる事として、人洋である。辞退したが後任があるまでと云うので譴々引うけてゐる。漫画川柳式に成らぬよう引緊めて居る。幸い登場の関取が各縣の代表川柳人として、うまく行つて居る。高松の米民事務局も興味を持

つて聞いておるそである。先日
も同部から「田舎香水」と云う題
が来た。早速放送局からの依頼で
扉面へ揮毫して送つた。田舎香水
とは撒肥の事である。呵々。今後
の番組は左の通り。

七月七日松山 徳島
八月四日高松 高知
九月一日松山 高松
十月六日徳島 高知
十一月三日松山 高知
十二月一日高松 徳島

四國四縣各局から批評一般を集
めて、大好評に氣をよくしてい
る。

八月四日は香川から山本麦一氏
高知から岡村嵐舟氏である。
放送局二係で他縣局へ出向なか
く御苦勞さまである。

暑中御伺

(柳人交遊のページ)

下関支部

句 嘆みな暑氣

吹きとばす健やかさ

昭和廿四年盛夏

藤井米三 望月白陽子

[illegible]

多日惠皮
加藤正生

岩崎勇記 住沢紫蓮

國弘平休

黃山市棠上竹谷區岩璣町一〇

晴日山雨晏

[illegible]

阿倍野区帝場山西一丁目十一番也。

木下幽王

.....

一、陽原身。我言不即止。

女 泥 背 山

天王寺區宰相山町一四七

清水白柳子

.....

東京都北区滝野川町八七一

宮
田
不
二

高田抱逸

勤務先 三井三池染料保安課

大牟田市瓦町二丁目地

大阪市東淀川区山口町四八三

黑川・紫香

1000
1001
1002
1003
1004
1005
1006
1007
1008
1009
1010
1011
1012
1013
1014
1015
1016
1017
1018
1019
1020
1021
1022
1023
1024
1025
1026
1027
1028
1029
1030
1031
1032
1033
1034
1035
1036
1037
1038
1039
1040
1041
1042
1043
1044
1045
1046
1047
1048
1049
1050
1051
1052
1053
1054
1055
1056
1057
1058
1059
1060
1061
1062
1063
1064
1065
1066
1067
1068
1069
1070
1071
1072
1073
1074
1075
1076
1077
1078
1079
1080
1081
1082
1083
1084
1085
1086
1087
1088
1089
1090
1091
1092
1093
1094
1095
1096
1097
1098
1099
1100
1101
1102
1103
1104
1105
1106
1107
1108
1109
1110
1111
1112
1113
1114
1115
1116
1117
1118
1119
1120
1121
1122
1123
1124
1125
1126
1127
1128
1129
1130
1131
1132
1133
1134
1135
1136
1137
1138
1139
1140
1141
1142
1143
1144
1145
1146
1147
1148
1149
1150
1151
1152
1153
1154
1155
1156
1157
1158
1159
1160
1161
1162
1163
1164
1165
1166
1167
1168
1169
1170
1171
1172
1173
1174
1175
1176
1177
1178
1179
1180
1181
1182
1183
1184
1185
1186
1187
1188
1189
1190
1191
1192
1193
1194
1195
1196
1197
1198
1199
1200
1201
1202
1203
1204
1205
1206
1207
1208
1209
1210
1211
1212
1213
1214
1215
1216
1217
1218
1219
1220
1221
1222
1223
1224
1225
1226
1227
1228
1229
1230
1231
1232
1233
1234
1235
1236
1237
1238
1239
1240
1241
1242
1243
1244
1245
1246
1247
1248
1249
1250
1251
1252
1253
1254
1255
1256
1257
1258
1259
1260
1261
1262
1263
1264
1265
1266
1267
1268
1269
1270
1271
1272
1273
1274
1275
1276
1277
1278
1279
1280
1281
1282
1283
1284
1285
1286
1287
1288
1289
1290
1291
1292
1293
1294
1295
1296
1297
1298
1299
1300
1301
1302
1303
1304
1305
1306
1307
1308
1309
1310
1311
1312
1313
1314
1315
1316
1317
1318
1319
1320
1321
1322
1323
1324
1325
1326
1327
1328
1329
1330
1331
1332
1333
1334
1335
1336
1337
1338
1339
1340
1341
1342
1343
1344
1345
1346
1347
1348
1349
1350
1351
1352
1353
1354
1355
1356
1357
1358
1359
1360
1361
1362
1363
1364
1365
1366
1367
1368
1369
1370
1371
1372
1373
1374
1375
1376
1377
1378
1379
1380
1381
1382
1383
1384
1385
1386
1387
1388
1389
1390
1391
1392
1393
1394
1395
1396
1397
1398
1399
1400
1401
1402
1403
1404
1405
1406
1407
1408
1409
1410
1411
1412
1413
1414
1415
1416
1417
1418
1419
1420
1421
1422
1423
1424
1425
1426
1427
1428
1429
1430
1431
1432
1433
1434
1435
1436
1437
1438
1439
1440
1441
1442
1443
1444
1445
1446
1447
1448
1449
1450
1451
1452
1453
1454
1455
1456
1457
1458
1459
1460
1461
1462
1463
1464
1465
1466
1467
1468
1469
1470
1471
1472
1473
1474
1475
1476
1477
1478
1479
1480
1481
1482
1483
1484
1485
1486
1487
1488
1489
1490
1491
1492
1493
1494
1495
1496
1497
1498
1499
1500
1501
1502
1503
1504
1505
1506
1507
1508
1509
1510
1511
1512
1513
1514
1515
1516
1517
1518
1519
1520
1521
1522
1523
1524
1525
1526
1527
1528
1529
1530
1531
1532
1533
1534
1535
1536
1537
1538
1539
1540
1541
1542
1543
1544
1545
1546
1547
1548
1549
1550
1551
1552
1553
1554
1555
1556
1557
1558
1559
1560
1561
1562
1563
1564
1565
1566
1567
1568
1569
1570
1571
1572
1573
1574
1575
1576
1577
1578
1579
1580
1581
1582
1583
1584
1585
1586
1587
1588
1589
1590
1591
1592
1593
1594
1595
1596
1597
1598
1599
1600
1601
1602
1603
1604
1605
1606
1607
1608
1609
1610
1611
1612
1613
1614
1615
1616
1617
1618
1619
1620
1621
1622
1623
1624
1625
1626
1627
1628
1629
1630
1631
1632
1633
1634
1635
1636
1637
1638
1639
1640
1641
1642
1643
1644
1645
1646
1647
1648
1649
1650
1651
1652
1653
1654
1655
1656
1657
1658
1659
1660
1661
1662
1663
1664
1665
1666
1667
1668
1669
1670
1671
1672
1673
1674
1675
1676
1677
1678
1679
1680
1681
16

戸田古方



評句 走馬燈

金沢 安川 久留美
名古屋 吉田 水車
姫路 夷 一笑
横浜 福田 山雨 楼

まえがき——本誌四、五月号から思い／＼に句を選んで短評を附した。久留美翁が参加して下さったことは感激に堪えない最初の句評が提出者を示す。

工場街指のないのと飲む屋台 (白星)

山雨樓 白星君の作句力の旺盛さには先日東京支部句会に出席しておどろいた。実に將來が期待される作家である。この句は同君が下松市にゐた頃の作品であるが、無雑作な表現の中に、工場のごせいになつた職工の何気ない姿がうかがわれ、却つて同情と感傷の心を起さしめる。客観はあくまで冷静に眺めているが、こころは決して冷淡に扱つてゐるのではなく、若い作者の胸にやきついたこの人生劇場的一幕は、何かしら深い凝視を湛えた句となつてわれわれ

の反響を呼ぶのである。

一笑 大分前に「仕舞風呂一本足が飛んで来る」と云う句があつたが、それは浴場でこれは工場街の屋台で見付けたものである。共に凄味はあるが場面が變ると感じも違ふこれは確かに最近の佳句である云えよう。讚。

水車 一説迫るものを覚える。所謂作者の張り切つた調子の出た句で実作の豊富さを見せている。ただ「指のない」と云う稍誇張さが氣になるが戦争が資本家に捧げた尊い姿を救ひ上げた功を認めぬ訳にはゆかない。

久留美 工場街と云うことを頭から説明したような句である。のむ所だから特に指を利用した点がやや川柳想を巧んであるが、その技巧も何やら芝居がかつていて面白くないもうちつと悲しさからはほえましいユーモアを捉んでほしかつた。

私服になると何か忘れるうちの人の (美奈子)

一笑 ほんとうに忘れるのかどうか、一應疑つて見ようとせずにもう信じ込んでいて、しかもそれを楽しんでいられる様子もほほえましく、ここにうちの人などわざと俗語を用いていられるのがうれしい。だがしかし「折艶うそ偽りを包むもの」と平然とそう書いて居られる御主人です。油断は禁物でございませう。

水車 句をなぶることはさけたいが「私服」と云う生硬な感じを「うちの人」と俗調で止めるのは修辭上如何かと思ふ。しかしかえつてそれがアイロニーをゆたかならしめる結果となるなら別問題だが「着変えろ」としたらどうであらう。

久留美 作者の夫を知るだけに私もこの二人の生活をほほえましく思つた。一笑君の申

さるる如く「うちの人」としたところに川柳味あふる。自由律としても面白い句である山雨樓 水車氏説の「着変えろ」とは又想が違つてくる。私服を制服に着変える場合も含むからだ。この句は寛いだ気分になると健忘症を發揮するところに主人公の長壽相があらわれて面白のである。物忘れを笑つたり悲しんだりするより、むしろ外出のときなど妻として細かい心使いを怠らない愛情が句にこもつてゐるのである。コンモンヒユウマニティを脱しない句であるが。

兒を抱いて此の幸福を續けかし (七面山)

水車 私には不幸子供はないが、私自身客観的に見て親が子供を愛する光景は随時随所で見受ける。外面的な愛撫のさまよりも内面的な肉親のつながりを深く感じようことこそは又一入と思う。たゞ自身の子供でなくとも愛らしさは變りはない。まして自分の子供を抱いて幸福感にひたり得ることは、世の中に之れ以上のものはあるまい。子を想う親愛の情を叶露した句は随分汎山あるが、其情において大差のある筈はない。いつまでもその幸福の続くことを作者のために祈りする。句としてもまとまつてゐる。久留美 どころなく和やかな

暑中御伺 (柳人交徴のページ)

大阪市東住吉区平野 西之町八三

橋本 緑雨
橋本 美奈子

阿倍野区旭町三丁目一四

須崎 豆秋

浜田 久米雄

岡山縣和氣郡
吉永町福満

冷雨献上

阿倍野区王子町三ノ三四

菊沢 小松園

大阪市(都島局区内)旭区
古市大道四丁目五十一番地

竹田 芦穂

川柳雜誌社八代支部

佐野 ト占

八代市浜成町六二四

女性の作にもうけられる。然し又父性愛としてもこの氣持ちはある。私は初めて長男（目下二十二歳）が生れ、その二ツ頃を抱いて慥かにこの直感があつた。句はトゲくしな一行的なのがよい。ただ下五にいささかキザな表現が欠点と思う。

一 笑 一 兒を抱けば一日の疲れもさりと忘れ、生活の苦もなく、明日の希望に胸躍らせる父である。子を抱く時のみ感じる大きな倅せ、だがそれはあくまで現在の幸福である。作者の夢を打ちこわしたくないが、これは決して続かない、けれども子供が成長すれば又別なところに幸福を見つけることが出来るであらう。

山雨樓 素朴な純情ではあるが甘さが鼻につく。感情がなまのままだと云える。過去において子を恵まれなかつた水車兄の提出は、多分に羨望的な魅力があつたのであらう。啄木のように作者の生活、思想、境遇などが一連の作品の中に滲みでくるようになればこの句は又別な脚光を浴びるであらう。

長男のひょうきんまでも僕に似る (柳 慶)

山雨樓 〇ひょうきんと云う地方語の中に滑稽がある。これはおどけとか冗談ぶつた態度を指すのである。句主の性格

が飄逸な方かどうかは知らぬが写真ではきわめて眞面目である。しかし写真で性格がわかるものではなく、句主が独りで長男が自分に似た性格をほくそ笑んでいる期かな句である。「までも」とあるから容貌も勿論似ているのであらうし、遺傳系統から云へばいふに似てゐる、むしろ男の子は母親に似たり祖父に似たりする例が多いのであるが、母親に似たのは一入可愛いものである。路郎先生の名句「俺に似よおれに似るな」を思ひの深さには遠く及ばないが、そして名句の圧迫を感じられるのであるが、この句のつかみ方にも拘すべきものがある。

一 笑 一 私もこの句は目に止まつた。ここに長男と云う者はそのすべてが自分に似て居る様な氣がする。小学校に上つてからそろ／＼個性が出来て來るとちよつとした癖まで自分にそっくりそのままである様に想えることがある。けれども第三者から見るとそれほどでないかも知れない。これは男親のみが知る喜びである、と共に淋しさでもある。

水車 父親と云うものはどこか大まかで、子供に対する細かい心づかいはいま母親まかせのようではあるけれどもやはり親の所はチャンとみて居るのが此の句である。

久留美 路郎氏の「俺に似よ……」の名句が頭にこびりついてゐる勢が、比べて余り佳吟としたりしない。文字にも引きしまりのない單なる主観句であらう。

おどかしてやりたく自殺して見たく (梨 思)

一 笑 一 昔から死ぬ死ぬと云う人に死んだためしがない。等と云われてるよけいに腹立たしく、いつそほん／＼に死んでやろうかと本氣に考える事もある。だがすべては若き日の悩みである。おどかす爲に自殺など出来るものではないとわかつていても、本氣になつて考へるところに若さがあるのだ。

水車 自殺者の心理は判らぬが、おどかすための自殺等は、一寸考えられぬ。「死んでやる」の「死」のおどかしがいつか実際に死ぬ氣にならぬと制限ない。若き女性の心理を描いては居る。自殺が一種の現実社会への抗議の場合もあるし、失恋と云う取りつかれ易い病氣のこともある。生か死かから来る眞実の叫びほど心を打つものはない。此句の場合右の何れに當るかは一見明瞭であらう。

久留美 作者はよしの女史のかつての「酒の句」の調子に着想、若き女性のこうしたデレンマはあると思う。「やりたし」「見たし」とせぬところに新しい試みの吟とせぬところ。山雨樓 七面山氏の句「薄情な世間え首でも吊つたろか」

は時局を諷してゐるが、提出句は一種のヒステリックな氣持を詠い、それを客観する云う所謂惡魔派の詩境に通ずる句ではないかと思ふ。女性の大胆な幻影、それ自体の中に詩があり夢があり逃避の場があるのかも知れない銀のふすまに舊弊の極

水車 平盤な句であるが七字調一句主としては珍らしい。そして成功のもの同氏の「爪に火をさすも」も同巧異曲、銀のふすまのこともふんいさがおもわれておもしろい。

久留美 單に封建的な家庭の一部を十四字にまとめただけで、川柳味に乏しいようである。「旧弊の極」も同くするといふまでもつゝ柔か味の表現をのぞむ。

一 笑 一 古くから川柳塔に活躍していた曉章氏がいつの頃から近作柳樓で、しかし時々佳句を見せて居られる。この句は根強い封建制に對する矢を報いているのだ。今度愚妻の里へ行つたら、足をのばして津倉村に同氏を訪うつもりである。

大阪市住吉区丸山莊園
篠山 彦彦
島 羊 作
竜堂鍼灸療院
糸本 醉月
布施市三ノ瀬二丁目四

石川縣大聖寺町字福田町五二
昭和印刷社
風見草吟社一同

淡路津名郡志筑町
大坂形 水

和歌山市今福北部二二八
秋 月 宏 方

佐賀縣松浦郡山代町柳久九二二
松 野 え い を

阿倍野区天王寺町三〇七一
岸 南 柳

西宮市高木字石沢町四八
川 名 部 修 三

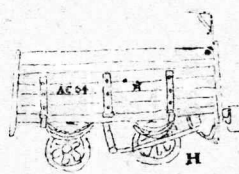
熊本縣八代市駅前
肥後銀行出張所
遠 山 夏 生



大掃除(二句)

竹槍が出て晝飯を笑はせる具塚市庸 同
十円の借用証をなつかしむ 同
復員のしばし時勢を見ると云ふ 同
旧姓に還りましたと未亡人 同
スロースロー盤の縁は切れてるに 同
他人よりましと貸したが不和の因 同
せめてものネームはとて賣りにゆき 同
古着屋にけなされ背廣帰つて来 同
肯定をさすまで女饒舌る氣か 同
道なきにあらずと役所にははせる 同
捨てられた頃の写真の顔の艶 大阪市ひさみ
接吻を見たあの夜のお星さま 同
手紙なんかで泣いた日がおかし 同
紙屑の様な男も御亭主か 同
こんな顔どこがいゝのと笑ひあひ 同
考へてみたら女も馬鹿のうち 同
避妊薬第何條にふれぬやう 大阪市草々
月俸二万なんだ保険の外交か 同
ハイヒール買うて頂く別な声 同
リンタクえまかせば飲める家さ 同
赤旗の新聞汗の手え買はれ 同
日曜の香具師銀行をバックにし 今治市文庫
賣りますと壽司屋書き度いのを堪へ 同
心まで寝て居ぬらしい皮靴 同
話題から遠のいた頃起訴猶予 同
佛壇の奥で軍人にらんどり 同
人間の淋しき時ぞ空仰ぐ今治市一風

あの人をよく泣かせけりそれも夢 同
青雲の志ありつんどして 同
麦刈を手傳ふ程の恩があり 同
菜園でサンマータム暮れかゝり 同
痔にかぎり異議なく父のゆづりもの 熊本縣斗四翁
新課長やつとおしめがとれた顔 同
配給酒俵が悪い時に来た 同
汽車賃があがつて逢えぬ日が 同
共学の教室喫茶店のごと 同
女ふと草紙のような身を想ふ 兵庫縣白鬼
箸重し手錠の人を見た一日 同
情熱に押されゝて女居る 同
首切りへ首切る側に居て瘦せる 同
くつたくな顔をして靴磨き 同
風鈴を見上げた方が勝つ 岡山縣牛歩
宝籤男やもめがミシン当て 同
聴診器見本の息をして見せる 同
腐るとも受けて置きました 同
四年間此の足音を待つてゐた 同
隅つこの火鉢へ来るは刻みなり 今治市松花
避妊法附録であれば買ひ易し 同
空クジを満座の中で焼き捨てる 同
坐つてるよりはましたと賣り歩き 同
俸せを他人が言うてくれる 小松市茶佛
カストリの店を覗いて旅馴れる 同
砂遊びどの子も丸い背を向け 同
かき込んだ茶漬はストに忙がしい 同
汗かいて食ふを封建主義にされ 大阪市葉光
野球も相撲も聴いて闘病 同
闇で儲けて年忌いとなむ 同
有難うと言わすきたない剰金を 同
厄年か知らんが一年待てません 滋賀縣美秋
振付の先生の手の無遠慮な 同
もつたいな過ぎると思へば夢 同
トールのたびに手鏡見る若さ 同



秋春筆雜

蟬のぬけがら

安川久留美

異性にも接せない周囲、色彩といつても病窓から見ゆる、モントフリジャの花が、大きな向日葵の花ぐらゐなもの、合宿のやうな廣い病院に毎日同じ顔ぶれに「お早う」と挨拶を交していても妙味が薄いそんな中からユモア、諷刺の句が生れやうはづはなく遠く山の起伏と夏の雲を眺めいつしか川柳味と疎遠になる昨今がさみしい。

病院生活に退屈のまゝ小宮豊隆氏著「芭蕉の研究」を拾いよみしといると中には川柳材になりさうな面白い隨筆がある「立石寺の蟬」の稿の中で「閑さや岩にしみ入蟬の聲」の句につき、歌人の齊藤茂吉氏がこの蟬をあぶら蟬と言つたのに異議を称え、夫れは「こいにい」蟬の方が適切といふことである。我等はにい蟬の暗喩を知らぬから、矢張り前句に對し、あの騒々しいあぶら蟬と解釈してゐた。一体この作句の場合この蟬の何であらうが構はないと思ふ。單なる蟬として句を味つた方がよい微細に亘る俳人の研究といふものは川柳人の頭え、徒勞にひやくともある。

病院の窓から程近いコートがつて殆ど毎日の如く野球戦が見える。ラヂオの放送と共にその勝負があきらかになるのを患者が欣んで窓からのび上つて観ている。然しスポーツには何の趣味も有たぬ私はラヂオもさかず、うたがつて野球戦の遠見で窓へ寄らうともせない。むしろコート迄の品やその他、情景に川柳のタネがない？とさがして見ることはある。偶々「惣坊主」を作つてもそれが下手な俳句になり易いから困る。川柳人は日常矢張り新しい人事に触れなくては……と痛切に感じる。自然ら又句になるが、人事を加味せればどうしても月並俳句の域に入りやすい、考う可きことであらう。

鍵がなければ戸外へ出られない特種の病院生活も一寸不自由ではあつたが、三、四ヶ月も之になれて来るとさのみ束縛を感じない。むしろ斯うした範圍のせまい社会として生きられる。一番いにも籠にも小鳥馴れ来り、曾て小樽の「氷原」に發表した句が偲ばれる。然しこの番いという狭苦しい四疊半裡で天井を仰向いてゐるやうでは、その狭い範圍の句しか生れない。百疊の大廣間に清風をうけて晝寝すれば自づと豪放な氣前になつて廣々とした句が生れる。それと同じく人間は環境によつてゐる／＼の句が生れる。川柳はその日／＼の生活から社会相を捉えて句材とし、その吐露する着想にある自己の滯足感を得るものであるから、從來示された一つの課題吟によつて作句す

医学博士こゝも儲けている普請鳥取市日満子
理解よし昔遊んだお蔭にて 同
家計簿のその後を訊けばつて居す 同
やりくりの上手さよ煙草さら 同
隣の時計向の時計開分けて朝寝愛媛縣孤
二人して働く朝の鍵を分け 同
平凡に生れさだめの畑を打ち 同
長男は貧しさを知るねだりやう 同
鯛味噌で歯のない母を喜ばせ 貝塚市千
四疊半キツチ閉めて口説く氣か 同
見送つて家の赤字を聞かされる 同
療養の妻に妬かれることもなく 同
山へ来てたべるもの皆別の味和歌山宏
奥様の理解が早い避妊薬 同
怪我をして来いど外科医も待つて 同
藥瓶不幸な奴だなと思ひ 同
履歷書は形式と云ふ蔓があり 徳島縣夕
てれくさやキツスとやらを 同
金を貸す立場にも君なりたまへ 同
七十でたばこを止めてどうする氣 同
二男一女でもう要りません子 岡山縣美
ソロバンの上では食へぬ理窟だが 同
退院日お客の様に扱かれ 同
句の友が帰つて時計一つなり 同
溜息も涙も出ないお酒の値 大阪市草
バステノール朝の雀にご挨拶 同
恒産も恒心もなく欠伸する 同
さし花がストの机に忘れられ 兵庫縣齊
ミスボリの友の一人はヅカガール 同
もう二度ふざけてほしい眸を使い 同
新築は木の香の中に灯がともり 鹿元島華
満員をよそに坐席の新聞紙 同
風呂を出た顔へお燭も丁度よし 同
耕牛の視角遙かに鯉 佐賀縣えいを

白い床上げて小蟹の退屈し 同
泌々を兒を抱いてみるストの父 同
事もなげに牛生る事もなげに 愛媛縣旭
内氣とは別に家出をやつてのけ 同
與太者に人生哲學聞かされた 同
一錢は温かい掌に拾われる 東京都万
満員車金剛力の母が居り 同
さづからぬ嘆きあるに避妊薬 同
扇まだ早きを淑女らしく持ち 大牟田風
映画見た話キツスの部ははぶき 同
Dといふ日記の伏字妻ならず 同
たからづかてんやわんやに幕が開き 滋賀縣幸
夕涼み冷やかな下駄をなつかしむ 同
將來の人は何処におはすやら 同
景品が慾しさにタワシ買ふお客 大阪府さ
ビール飲む表情がよし初夏の町 同
靴磨く子に金儲け教へられ 同
インフレの家なき子等に婚期来る 三原市正
母は泣き娘はふんど映画出る 同
夢に見た貴方は縋り取つていた 同
とに角も馬鹿は長いき組なりき 大阪府小
影法師お前も泣いてゐるんだね 同
芋虫のやうにベッドに僕がゐる 同
いさゝかのゆとり花の種を買い 石川縣陽
母さんの方が氣をもむ豆選手 同
コップ酒もう我々のものならず 同
熱演え相済みません子の欠伸 岡山縣潮
良い夢を添寝の坊にけ破られ 同
五十年家族の夢を包む蚊帳 同
藥瓶へ末ッ子メダカを飼つてゐる 大阪府桃
本当の女房五十になつてから 同
競馬場恩師と会つた苦笑ひ 大阪府純三郎
靴下の大穴苦學をやつてます 同
先生と兒の約束が寄附だつた 愛知縣叶
平

ることは、一ツの智慧くらへ的な
遊戲ではなからうか。川柳を現在
よりも高踏的とするには、この辺
の立場を考慮して俳句と異なる「川
柳」の個を尊重せねばなるまいと
思ふ。
(七月二十四日)

これでも作家か

清水白柳子

句も殆んど詠めず、理論も深く
は知らなくとも、川柳が好きなた
けで、いはゆる川柳作家だらうか。

◇

句作と言つても僅か月二、三回
の小集句会に出かけて、作句する
のが腰の山、殆んど毎日夜業を
して自分の時間と言ふものがない
朝からでも自分の時間と言へるが
手を休めてゐては食へなくなるの
で、夜はラヂオもゆつくり聞いて
居られない、御便に返事も二度に
一度は失礼する程で、雑誌を読ん
で居ても十分もすれば、疲れて寝
こんでしまふ。句などは考へて居
るうちに白河夜船。こんな毎日が
続いて居る職人に、むづかしい理
論は分かりそうにもない、これで
も川柳作家だらうか。

◇

宇井無愁氏の「川柳はユーモア
文學の一類を誘ふ」で、思つて居る
通りの事が書いてあると喜んで見
たり、石原青竜氏の「かくて桃源
の夢は続く」の中の「ザマア」に
に喝采したりして居ても、川柳作
家だらうか。

◇

大岡百中園氏の「川柳のアヴァ
ンギャルド運動」を読んで、判つ
たり、判らなかつたり、松本芳味
氏の「川柳の孤獨」の結語「ぼく
は自分のいのちを抱いてこの孤獨

な道をゆく」に深く共鳴したり、
「單詩御遺」北川不知氏の中の
「その名称「川柳」と言ふ文字を
世傳の中は埋没せしめんために」
にふんがいて居ても、これでも
川柳作家だらうか。

◇

詩と言ふものはどんなものか知
らないで、あゝ詩吟の詩でずかと
言つたり、リリッとか抒情詩だと
言ふことを知らなかつたり川柳非
詩論をよんでもこれは少し変だぞ
と思つてみたり、川柳を詩の境地
まで引上ると言ふのを聴んでも、
そんな事をしなくても、いま作句
してゐる心がすでに詩である以上
産み出されたものが詩でない筈は
ない。表現の上で詩の形に近くな
へてもなんにもならないのではな
いか、と思つたりしても、これで
も川柳作家だらうか。

◇

句会はこのよい、月一回の例会
にはみんなの顔をみて色々な話を
することゝをよなくたのしんで居
たり、支部の小集でうれしがつた
りしてゐる間はよいが、他所の句
会へ出かけてはいけないと、言つ
たとか言はれたとか小さいことに
こたはつてみたり、人の集りが多
いとかなんとか、句会が興行的
になつてはだ落するばかりだとふ
んがいてみたたり、選者の定め方
が一方的だと非難したりして居る
これでも川柳作家だらうか。

◇

新傾向の雑誌や句会では新傾向
の句を作り、保守的な雑誌や句会
へは保守的な句を送つたりして、
相当の入選句をよみ、句のうまい
人だとほめられて自惚れてしまひ
本當の自分の句はどんなのか見失

儲かつて來そで煙草喫ひ盡し 同
 見るだけで良いのよもつと歩こよ 香川縣迷観子
 眞実を語り愚かな我を知る 同
 嬉しい日近く新姓書いて見る 熊本縣瀨 歌
 のぞみなきに非らず二ツの鐘が鳴り 同
 叱られてゐるのに風鈴だけ聞え 岡山縣茶 々
 子と私どうでも生きん紅を塗る 同
 友情にすがつて今日も呑み歩き 岡山縣瀧 年
 負け將棋風鈴の音も腹が立ち 同
 ながいこと待ちましたと云は 下関市九呂平
 税務署が拡張工事しますとさ 同
 子沢山産婆に避妊教へられ 貝塚市周太郎
 梅雨又熱計表をみだすなり 同
 高い値に迷うことなく諦める 愛媛縣巖
 妻刈りも待てず嫁入りしてしまひ 同
 子宝に恵まれますと好い手相 石川縣冬思夫
 風鈴を鳴らす生活を見て帰り 同
 又一人家族手当はふえるけど 姫路市笑 鬼
 基準法守れば田植間にあはす 同
 子を負ふも税務署行の一手段 日田市独 活
 税権を守り人権ふみにちり 同
 宝くじ当てる悲願も笑へない 熊本縣宝 久
 招かねば押かけて汚吏飲みにくる 同
 敗戦四年まだ張紙でゐる時計 堺市太 路
 電話二十何かわめて証券屋 同
 在間小機兄全快を祝す
 病魔退散再起のベタル踏む 新居浜鶴 声
 生ビールならお相手します未亡人 同
 好きなお茶でも隠居部屋の午後 愛媛縣早 蕨
 軍隊歌元將校も田草とる 同
 誰れか知ら來るらし蛙鳴きやみぬ 兵庫縣尋 四

尼寺と聞いて尋ねて見たくなり 同
 岩鼻へおとすふりしてだきつかせ 東京都登 志
 割箸を前歯で割つてゐる伊達男 同
 お茶のみに誘つて硬難打診する 東京都高 志
 ミシン踏む姿またよし恋女房 同
 夕焼の色を出したと云ふ絵の具 大阪市素 光
 此のギター上手になつて恋もなし 同
 重役の残業決まつて閑ばなし 東京都東 夢
 元代議士夫人で賣れて女給も居 同
 何故和せぬ同じ血だのに人だのに 兵庫縣無 聖
 従順な内にも同権強く見せ 同
 公約とは何差押へする事か 愛知縣北 雷
 初孫の行水テンヤソソヤなり 同
 どう見ても子持と見えぬ派手な 大阪市恵 風
 母の日もやつぱり母は忙しく 大阪市葉菜子
 社長酔ひ又失恋の話出る 宇部市月 召
 差押へされても遺憾なき物ばかり 愛知縣竹 坊
 キヤツチボール擲む数より逃ぎ 数 大阪市露 草
 滞納の男新車で派手に行く 滋賀縣斗 志
 療養所住ひ傘まで持つて居り 大阪市五 郎
 標札に次男までを書けと言う 大阪市文 雄
 病み呆けやつぱり写真撮るときめ 上田市一 行
 納骨へ雲となつた並木道 宇部市金路郎
 くじ引に大人の家によだれかけ 布市日出夫
 日雇で生きて居ります妻も朽ち 石川縣夏 波
 附添の或る日その目をふとおそれ 香川縣朝 兒
 希還し
 味噌汁の香りやつぱりいゝ日本 廣島縣芳 泉
 蚊帳の中二時時計と睨めつこ 岡山縣秀 鶴
 板子の厚いところを向けて出す 奈良縣宇都羅

つてしまつて居る、これでも川柳
 作家だらうか。

病閑戯作

木下幽王

作は学校の「星登」で品行「方正」なのに、親父は毎晩「一笑」酒「避光」「おさむ」らす「豆秋」なを辞せず。

借金の「里十九」も抜へんくせに「潮花」ちよかと「香林」もせんと、女房が供へたお「みき」を「夢裡」に「吞水」したおかげで「鈍太」悪酔。

え、「斗士」をして「ポー」となり「淡舟」の中をかき廻すやら「愛論」を投つてるやら、「無鬼」になつて止める女房を「一舟」して「鋭々」と投げとばし、その上「竹莊」てめえの「文蝶」面が氣に入らぬと犬「角堂」あげくの果ばさあ「好郎」せ!!と「無人」の野を行く如し。

「正思」に耐ず私が「慈雨來」のよしみを以て止めに行けば放つたものが「山石」して「一步」も「鈍美」もならず。

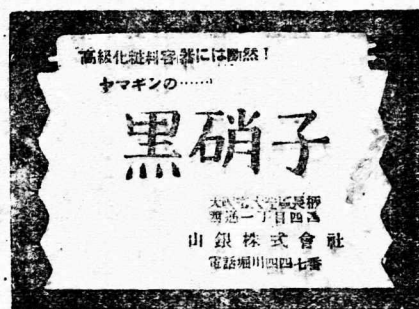
「省二」の「〇丸」に破れた穴から、もう「霞乃」よしな止めれば警察へ「湧三」「定美」も皆も「奇朗」てるだろもうと「嶺泉」になれと叫べば

今迄眞赤な顔かたちまち「白面人」となり「九坡」ばら／＼「妄夢」を見て居たとあやまる事「葉」

そこで「孤浪」は「良子」と意見すれば「わたる」世間に鬼は無し(無鬼)や長いものには「魔花麗」るとばかり「魔生」ですかと平身低頭。

それ「民郎」「美奈子」の通りわれてしもうて「榮泉」「北海」すまり仕方がないわれと女房はしばし「静觀堂」そこで私も女房を「生々庵」ちようしてやれよ「恒明」てもスイも「不水」もある男「種美」とするのば妻だけだぞと「リリー」しい顔して「井蛙」よく引揚げた。

「一辺」「幽王」云はうと思つてた此の話もあまり長く成つては「史葉」がないから「小機」そろ退却御「瀟湘」多謝。





川柳家 都々一坊

富士野鞍馬

都々一坊扇歌といへば年配の人なら誰でも知つてゐるであらう。天保のはじめ頃京都のヨシコノを江戸へ持つていつて、独自一流の唄ひふりて街頭艶歌師のやうなことをやつてゐた坊主であつたが、落語家の舟遊亭扇橋に拾はれて扇歌といふ名をもらひ門人となり、自ら都々一坊と名乗りそれから席へも出て、やはりヨシコノの工夫したものを唄つて流行した。ヨシコノは七七五調二十六音の小唄で、それが江戸つ子の氣風にあひ全國に傳はり当今でも尙流行してゐる所謂「都々逸」である。都々一坊の名がそのまゝ流行小唄の名になつて、上方でもその後ヨシコノと云はずドドイツといふようになつてゐる。その都々一坊が師匠の扇橋について狂句の方も門人としてその道に入り、師匠と共に青山の眞砂連に属し、時々句会へ出席して、天保四年頃から作り始め柳多留の終編天保九年の百六十七編まで都

々一坊又は扇歌とした句が見える。天保五年の江戸浅草福井町山崎屋清七から出版された「川柳百人一首」には、堂々時の大家と列んで百人の内に入つてゐて、その句は
大名の家主になる御本陣
といふので天保四年十一月十九日に樞庵の月並会で「本家」といふ二字結題に作つて四世川柳の選に入つた句であつた。「百人一首」の句は何れも四世川柳と文目堂礫川の再選にかゝるもので、当時相当權威のある句とされてゐたのである。
師匠の扇橋はすつと前から作句してゐて、二世川柳の時代文化四年頃の柳多留にその句が見え始め落語家であるから、いつも小手先上手に作つてゐたが、どういふ訳か二十年余りの長い間中絶して、天保になつて復活したが、天保五年に亡くなつてゐる。その追善句会が天保九年六月二日に催され、都々一坊扇歌は選者級ではないが、師匠追善

といふ訳で選評をしてゐる。都々一坊の選はこの一回切であつた。都々一坊も落語家であつたので、常に古句をすこし覚えてゐたためか
我に口なければ壁に耳はなし
といふ前年浜松の一泉が柳多留に發表した句を百三十八編に借用したり
座敷半時にハンレイ伯父きなり
といふ柳樽拾遺の句を百五十二編で焼直したり
白くなるものとは見えぬ洗ひ髪
といふ十九編と百二十八編とにある句を百五十二編で盗用したり

七の字と他人ではなし十文字
といふ武玉川四編の句を百五編に一寸借りたりしてゐる。こんな王合で作句は師匠の扇橋程上手でもなく、句会へゆけば至極安易に片づけるといふのであつたらしく、結局選者級にはなれなかつたよう

である。今から考へると「都々逸」の創始者として一寸敬意を表してもいゝように思はれるが、江戸時代の階級のやかましい中では何かと難かしい事情があつたであらう。

柳多留の天保調は「二字結

みどり

上六交又点角西北

ビヤホール

鳥ヶ辻同人

会長 相談役
編輯兼會計 幹事 編輯部

尾崎方正 市場漫食子 吉谷升水 小沢愛論 森下斜水 西辻竹青 岡野良子 以上不朽同會員

池戸桃村 木村晚成 久保井柳太郎 酒井純三郎 田中耕天 多田禿天 津村神峰

中谷葉栄子 若林草右 足立春雄 藤村清堂 西川惠風 井上露芳 牛田晴夫

東京都港区芝南佐久間町一ノ五二
高須啞三味
名古屋市中区幸樂町二ノ一八
伊志田孝三郎
東京都台東区豊住町十一
山路星文洞
静岡市中田町一ノ二〇
落合落瓢
大阪府南区西櫓町二一
脇田梅子

暑中御伺 (柳人交歓のページ)

高 鷺 亞 鈍
大 西 野 介
亀 山 晴 峯

特殊紙器工業株式会社
大阪市阿倍野区晴明町通一

「題」で作られた句が多いので無理な二字嵌めこみの句が多く見られる。さて作つてみると二字結といものは仲々難しく作りにくいものである。厳密に調べると二字結題は、文政九年二月二十八日の会に当日即題として「虎、鯰」「扇、菊」の出題が始まりのようである。この時四世川柳が選んだ句は小菊の花も扇屋は八重になり

(管子)

といふ風であつた。

都々一坊扇歌の句もそうした時代に作られたものであるから佳句は少いが、柳多留百三十二編から百六十七編までに見る相当多い句数の中から比較的よいものを拾つてみる。次のような句である。

笑ひ上戸が侮みとは間がわるし

(三三)

四海波おさまるとこの橋渡し

〃

大神樂鼻や頼に丹羽の紋

〃

傾城の柳に隠居腰をかけ

(三三)

天名の家主になる御本陣

(三三)

天我を見放し給ふ今朝の雪

(三四)

穴かしこきて面白い文のとめ

(三四)

おつとせいころばぬ先の薬なり

〃

蝙蝠が店だてをくふ橋ぶしん

〃

乳母ばかり祖奉公に値が下り

(四五)

神子の立つまでは地声の神樂堂

(四九)

大下馬のあたり諸候の衣紋坂

(五〇)

一心をさらして那智に名を残し

(五一)

爪のある傘をさすいゝ和尚

(五三)

若様の武者絵のやうな角大師

〃

水車かわりこつこにふみはづし

〃

いふなりになれば佛へ義理がかけ

(五五)

飛車道を突つ切るやうに堀へつけ

(五四)

妻の丈け唇の先も二三寸

〃

船止めの石もあれやと母の愚痴

(五六)

組板で光りをみがく男達

(五六)

早桶ばらりによいと出る黒砂糖

〃

聖堂は道をたづねる辻番所

(五六)

山之内

血圧降下には
アーグレミン

定劑
注劑

血管アウトホルモンとアミン塩類

山之内製薬

花の山茶を煎じるも櫻炭

(二六)

乳母晝寝嗜みつくやうに狎が吠え

(二七)

表徳は都々一坊としたり、扇歌としたり、その時々都合でどちらも使つてある。時には都々一坊扇歌としたのも見え、前掲の句を見ても、その六年間だん／＼に上達はしてゐる。天保九年以後の川柳家都々一坊は柳多留ではわからない。ヨシコノを改良した流行小唄「都々逸」は一九四九年の今日でも全国に唄はれてゐる。

暑中御伺 (柳人交歓のページ)

川 山 宮
部 支 京 東 雜 川
石 加 竹 根 植 植 川 山 宮
井 藤 田 岸 田 村 根 田
高 守 登 東 ひ 圭 好 白 不
志 夫 志 夢 し 三 郎 星 二

中島小兒科診療院

中島生々庵

診療所 大阪市南区鰻谷中之町二〇

電話 南 三九八四番

自宅 堺市浜寺諏訪森西三丁二七二

電話 浜寺 八二四番

不朽洞

麻生路郎
麻生葭乃

大阪市住吉区
万代西五ノ二五

武部香林
武部若菜

大阪市東淀川区三津屋
北通四丁目二九



てれんいつはりなし

茗荷屋の奥州

阿達義雄

宝暦七年の序のある「近世江都著聞集」巻五の中に茗荷屋の奥州について次の様に述べてゐる。

江戸町茗荷屋の奥州といへる傾城・其頃名高く、客座配心立て等なをざりならずと、万客に親しく勤むといひ、情よく知りて甚だ誠深く、その夜〳〵の客をたとへ初会にても、至極大切に、馴染の客乗りにて、初め上りし客を貰ふ事更になく、一夜の夫と客を我が佛と尊び、女房の貞実をつくして、他に心を傾けず客を介抱し、いかなる不男にても、是を誠情する事おるかならず。傳へ聞く、難波の夕霧は、此の道の情知りと申しけれども、おさ〳〵此奥州には及ぶまじとぞ申しける。

或時、初会の客の酒を過ぎて、大きに酔ひ病みしを、其介抱、幾年を馴染みし女房も及ぶべからず、其客、曉に大きに吐逆しけるを、禿其他の者にも知らせず、取まかなひいたはりける。其客しかも不男にして、女の情を通ずる迄にもあるまじけれど

も、斯くの如き事どもなり。なか〳〵かゝる金盛の女郎、何とてかく致すべきや、うるさく汚して、罵りさみすべきを、却つて外の人の知らざる様にいたはりし事、遊里第一の希れものやさしき上、(中略)さて此奥州が持たせたる挑灯は、紋をば付けずして、かなの文字にて、「てれんいつはりなし」と書きて、中之町・揚屋町・へも出したり……奥州が本心の舐は、来る客毎にて、てれんいつはりなしといふ、本舛を挑灯にあらはし照す心なり。誠にむべなる女郎なり。

尙、其角の俳句「曉の反吐は隣か郭公」は右の事に基づいて詠んだものと説明してゐるが之だけは少し怪しい様に思はれる。

さて、奥州の事跡について考へてみるに、大体次の様なものらしく、特に「てれんいつはりなし」について色々なことが言はれてゐる。その話として傳えられてゐるものの

一つに次の様なものがある。寛文の頃、吉原の茗荷屋に奥州という有名な遊女があつた。奥州は書の道に優れ、氣立てのやさしい女であつたが或る意地の悪い客が、事毎に「女郎の誠と晦日の月」などの文句を持ち出して、遊女は偽のかたまりである言つて、得々として快哉を心に感じてゐる者があつた。余りに此の種の嫌がらせの言葉ばかり連発してゐるので、流石の奥州も腹に据えかねて、一策を考え出した。

それは、揚屋へ往来する時若い者も持たせる提灯に「貞清美婦胎」という五文字を書

品質優良

先
ン
ベ
針
セ
ム
クリップ

立川ペン先株式会社

上野市

き、其の裏に「てれんいつはりなし。」と書くことであつた。

てれんとは珍らしいなと提灯屋

森口田郎

勤務先 大阪府北区宗室町
大ビル三三三三三
住 所 大阪府外藤井寺町
字岡三九

戸倉普天

兵庫縣水上郡
沼貫村小野

神戸市(中央局区内)

兵庫区神田町七九

電話 元町 六五八六番

三條東洋樹

西垣錦風

奈良縣生駒郡伏見村
字菅原九〇〇番地

奈良縣宇陀郡三本松村

上田翠光

大阪府中河内郡大戸村
上石切三六一(枚岡局区内)

種 瓜 平

川雜篠山支部

田代尋四

家沢薺花

小西無鬼

弓削川柳社

岡山縣久米郡弓削町
会員 五〇名

丸山弓削平(肇)
直原七面山(信春)
黒田笑泉(將詮)

山口縣宇部市草江沖
字部炭釜内

上林粗影
(利郎)

廊（くらわ）の箱提灯というものは、紋ばかり書くものであると思つていた提灯屋は、この註文には、いさゝか驚いたことであらう。

奥州は赤はらたれぬ女郎也

(三九)

奥州では噓を言うことを、「赤腹をたれる」と言つていたので、同じく遊女奥州の噓を言わぬことを「赤腹たれぬ女郎」と利かせて詠んだものである。尙、仙台騒動の際、江戸詰の家老は惡の張本人であつたが、之を「赤はらを手づよくたれる江戸家老（柳多留三四）」と、矢張り奥州語を取り込んでゐる。即ち、この言葉の存在によつて、その句が奥州關係のことを意味しているのに氣がつくわけである。

提灯に「てれんいつはりな
し」と書くことによつて、
奥州が提灯は身のあかりなり

—

の句意の様に、その提灯は揚屋入りの道を照らして呉れると共に、それが其儘奥州の身の明りとなつた。その爲であるうか、遊女奥州の名は、忽ちにして、その「てれんいつはりなし」の遊女として、江戸の隅々まで抜つて行つた。即ちこの提灯が身の明りどころか、大いに宣傳的効果をあげたのであつた。洒落本等で遊女の穴などばかり搜している山東京傳は、『息子部屋』に「奥州が箱提灯に、てれんいつはりなしと平仮名に書かせしも、容におもひ附かせん爲

なるべし。」と看破している。
成程、そんな処であろう。

奥州の「てれんいつはりな
し」の提灯から思いついたら
しい句に、

てうちにてれんいつわりなき
隠居 (九二)

九二



てれん僞なと唐茄子が好きでヲ
ス (二四)

種末番がかつた句である。かゝる句の解釈は老境に達しなければ分らないものかも知れない。「唐茄子」は江戸では南風の総称らしいが、未だ外に隠れた意味がある様に思われる。

「ナス」という語から考えると、之は、元來、靡語で遊女の言葉でなければならないので、どうも明瞭には分らない。尤も、遊女奥州が「てれんいつはりなし」などと氣取つた提灯で道申するのも、要するに、カボチャの様な頭のある客でもよい、客が欲しいのだと、解釈しても通らないわけでもないが。

暑中御伺

(柳人交欲のページ)

清水市 清水四九一

富士野鞍馬

七人の子へプラスした夏のいろ

水谷鮎美

尼崎市西字口開一八一

名古屋千種区親町

一丁自六五

吉田 水 耳

廣島縣竹原町專賣公社内

弘
津
柳
慶

遙山亭 尼 綠之助

出雲市高松

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
305
306
307
308
309
310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
330
331
332
333
334
335
336
337
338
339
340
341
342
343
344
345
346
347
348
349
350
351
352
353
354
355
356
357
358
359
360
361
362
363
364
365
366
367
368
369
370
371
372
373
374
375
376
377
378
379
380
381
382
383
384
385
386
387
388
389
390
391
392
393
394
395
396
397
398
399
400
401
402
403
404
405
406
407
408
409
410
411
412
413
414
415
416
417
418
419
420
421
422
423
424
425
426
427
428
429
430
431
432
433
434
435
436
437
438
439
440
441
442
443
444
445
446
447
448
449
450
451
452
453
454
455
456
457
458
459
460
461
462
463
464
465
466
467
468
469
470
471
472
473
474
475
476
477
478
479
480
481
482
483
484
485
486
487
488
489
490
491
492
493
494
495
496
497
498
499
500
501
502
503
504
505
506
507
508
509
510
511
512
513
514
515
516
517
518
519
520
521
522
523
524
525
526
527
528
529
530
531
532
533
534
535
536
537
538
539
540
541
542
543
544
545
546
547
548
549
550
551
552
553
554
555
556
557
558
559
560
561
562
563
564
565
566
567
568
569
570
571
572
573
574
575
576
577
578
579
580
581
582
583
584
585
586
587
588
589
590
591
592
593
594
595
596
597
598
599
600
601
602
603
604
605
606
607
608
609
610
611
612
613
614
615
616
617
618
619
620
621
622
623
624
625
626
627
628
629
630
631
632
633
634
635
636
637
638
639
640
641
642
643
644
645
646
647
648
649
650
651
652
653
654
655
656
657
658
659
660
661
662
663
664
665
666
667
668
669
670
671
672
673
674
675
676
677
678
679
680
681
682
683
684
685
686
687
688
689
690
691
692
693
694
695
696
697
698
699
700
701
702
703
704
705
706
707
708
709
710
711
712
713
714
715
716
717
718
719
720
721
722
723
724
725
726
727
728
729
730
731
732
733
734
735
736
737
738
739
740
741
742
743
744
745
746
747
748
749
750
751
752
753
754
755
756
757
758
759
760
761
762
763
764
765
766
767
768
769
770
771
772
773
774
775
776
777
778
779
780
781
782
783
784
785
786
787
788
789
790
791
792
793
794
795
796
797
798
799
800
801
802
803
804
805
806
807
808
809
810
811
812
813
814
815
816
817
818
819
820
821
822
823
824
825
826
827
828
829
830
831
832
833
834
835
836
837
838
839
840
84

夷
二
笑

課題吟

『シン』

夷一笑選

ミシン踏む妻へ子供をあやしに來
ミシンするし洋裁學校日曜日
内職でないシンガンのよくはさみ
自活する欲喜ミシンの音がさえ
ミシン踏む音にもなれた子の寝顔
明日は日曜ミシン光らせてたを
垣越にミシンの音のなつかしみ

笑鬼
不三
二鳥
清吹
こん
和水
砂川
宇都
羅輝

ジンガーを聳持つてた自慢する失態は月賦のミシン賣つくらまひ一番いゝ処えミシン置くらまひ夜なべするミシン子供は父に寐る灯を下げて五人が生きるミシン踏む鼻唄のミシンはニールツクを立立てて月賦なら買ふとミシンを見て戻りロングにはきれが足りないミシンがバ道憶の窓へミシンの音がやみし床上げの其日ミシンを踏んで見る趣味で踏むミシンのリズム心よとミシンとは縁なく祖母は針を持つミシン踏む足的位置から教へり

柳斗北一庸正夕大青同葉迷奇
堂四翁路穗司一湖丹子光觀子
朗

ミシンかけかけ自習の子を叱り
 ミシン踏むリズム生活のテンボなり
 税務署の智慧はつきずかミシン税
 シヤツの縫頼めばミシン修理中
 赤丸をミシンに見せる頼母じさ
 ぜいたくでないミシンを嫁せが
 再起の日ミシン踏むに義足鳴り
 差押へミシン一番先はられ
 ミシン踏む妻の後れ毛艶もなく
 女三十縁談もなくミシン踏む
 忙しん踏む娘洋画にして見度し
 ミシン踏む娘洋画にして見度し
 自轉車の襟にミシンを踏む若さ
 佳・ミシン糸娘の獺癪知つてゐる
 佳・結納が来からミシン買ひ求め
 佳・再婚の話ミシンの手を止めず

春柳 旅風 満年 華水 草々 えいを
 五郎 吐平 鮎美 弓削平 同 慈郎 燕子 水客

佳・ミシン糸せわしい音でふつと切れ
佳・ミシン踏む妻に感謝の忘れがち
佳・ミシンの音止んで添寝の母となり
佳・又糸が切れて舌打りするミシン
佳・ミシン踏む音を握つてのさうし
佳・ミシン踏む音へ手紙ひのきさ
人・馬鹿になつた妻のミシンで危機を抜け
地・生活の苦勞を知つてゐるミシン
天・嫁ぐ日も近くミシンの軽い音
軸・ミシンかけ指を縫ふ過去のこと

選評 過去二十年間ミシンと共に暮して來た私であつたがミシンに關する句は全々もの選に當つて多くの佳句を見せしめるべく嬉しうなげけり句である。自分の経験から見てもうなげけり句もかなり多かつたといへば、奇郎氏の『ミシン踏む足的位置から教へられ』等がそれである。

三花堂
孫拙
山雨樓
鮎美
七面山
常生
青丹子
一笑



投稿清規
用紙は原稿用紙、文字を正
確に開き、月日及場所記入、締
切毎月廿五日、投稿先本社宛

本社七月例会

七月三日 十三時
於 大宮文化会館

川柳熱が現時の世相を圧して少しづつ、盛り上つて行くことを感ずる。各作家は、猛暑にもめげず作包三昧に浸つた。路郎主幹は川柳家はもつと勉強しなくてはならない。勉強は川柳の上だけでは、川柳だけに就いて云つても、一應古いものを読んで出直す必要があることを力説された。

(幹事)

出席者 路郎・黙平・春柳・鬼子・柳笑・すゝむ・文蝶・文雄・愛論・史葉・里十九・香林・太路・東雀・正司・光民・紫香・古方・豆秋・鮎美・緑雨・芹穂・栗・竹莊・露彦・梅里・花村・小柳子・小雅子・葉平・瓜平・春巢・白柳子・霞乃・梨里

兼題「蚊」 麻生路郎選

祭りばやしが蚊や火のつる来る 史葉
蚊を追ふてくれる看護へ涙ぐみ 柳笑
恋最中蚊の襲撃に容捨なし 正司
蚊を拂ふ仕草で舞台廻り出し 栗
蚊の中で悪い相談さまるなり 柴香
ふところわしく畫の蚊を殺し 小柳子
おそい掃りへさやく蚊なりき 栗
蚊取り香の廣告もい蚊にさされて 文蝶
子のおでこ射した敷地になつて追ひ 春巢
朝の蚊は埃たうきで掃はれる 芹穂
お悔を云ふたうきに蚊に咬まれ 香林
蚊に喰れ乍ら夕刊賣り残し 美奈子

蚊ならこそ、血を吸ふて
ホスターの蚊はたたくたくなく
墓参して蚊に食はれたら供養なり
蚊に喰われながら二頁三頁
蚊とんぼで博士論文書くといふ
蚊の中で父は漢書を手放さず
ダンサーの脚とも知らず蚊がささり
女事務蚊の鳴く家へ戻つて来

兼題「夕涼み」 武部香林選

夕涼み医者の車にふとあはて 紫香
恋人が先に來て居る夕涼み 文蝶
子の花火つけてやつてる夕涼み 竹莊
縁側の椅子に坐るも夕涼み 古方
夕涼み電車通りへ出て戻り 紫香
夕涼み親のハラ／＼する話 露彦
夕涼み子なき夫婦へ流れ星 鮎美
鮎の灯を小さくのぞんだ夕涼み 太路
町涼み川の廣さへ誘はれる 小雅子
弄けたのが音頭とつてる夕涼み 里十九
夕涼み素肌の匂ふワンビース 春柳
夕涼み一人あるけば詩人めき 小雅子
夕涼み星はだん／＼ふて来る 鬼子
夕涼み星はだん／＼ふて来る 鬼子
警官も話しの中に夕涼み 東雀
張り板へ一家ならんだ夕涼み 栗
夕涼み窓の窓から尻を出し 芹穂
夕涼みごころか首が斬られさう 梅里
粉のついた子が重なる夕涼み 美奈子
不渡りを涼み台まで告げにくる 白柳子
夕涼み道頓堀へ出てしまひ 鬼子
落魄の友を見つけた夕涼み 太路
夕涼み犬のくさりと解いてやり 豆秋
物干で極楽と云ふ夕涼み 柳秋
夕涼みこらに橋があつたはず 栗
夕涼み一人となつて星を見る 香林
夕涼み食用蛙の音がする 香林

兼題「半ズボン」 西尾栗選

半ズボン氣安い人にしてくれる 愛論
半ズボン二杯で出て行くビートル 露彦
半ズボン同志外野でうまが合い 文蝶
半ズボン今日は二号をつれて出る 小雅子

梅雨空へ半ズボンのまゝ出掛けの氣
火穴をつかんだららしい半ズボン
半ズボン朝からベタル踏む儲け
半ズボンあんたはんか云われたり
皺くちやの馬券出てき半ズボン
半ズボン恥しいほごやせてゐる
半ズボン男同志の御堂筋
半ズボンの脚からトラバサを降
半ズボンで行けば豪華な應援間
税務署でまいてゐる半ズボン

兼題「つけ落」 清水白柳子選

つけ落をして家計簿用が足り 片穂
安いと思たんやとつけ落拂はされ 竹莊
つけ落がありまんねんさへをかき 香林
つけ落のつづま合すい女房 愛論
つけ落であつた命が生きて居る 正司
つけ落を叱られてる娘はガムを噛 古方
つけ落ですまぬ事態になつて来る 同
つけ落を信じて一行あけておき 同
置物の狸つけ落知つてゐる 鮎美
おなじみのつけ落来月に廻される 竹莊
つけ落のチエックにインクにじむなり 小雅子
お役所のつけ落又も出直させ 小雅子
つけ落は難費の中にくり込まれ 芹穂
つけ落が解けつ會計夜を徹し 花村
つけ落は知らぬ振りして辻を折れ すゝむ
つけ落がわからず幹事肚をきめ 同
もういづものつけ落ともいとおれや 栗
つけ落ま、小切手へおごじして 香林
衝突をしてつけ落のこにふれ 白柳子

兼題「朝顔」 黒川紫香選

守銭奴の庭に五寸咲があり 白柳子
接骨へ来て朝顔のつぼみ見る 同
新聞屋朝顔よけて入れて行き 文雄
明日開く朝顔縁に雨を除け 黙平
今日も又一つ咲いたと便りする 春柳
酔さめの水朝顔が咲いている 豆秋
看板の足へ朝顔まといつき 栗
朝顔の蕾かぞへ朝顔旅に出る 鬼子
打水をする朝顔涼しそう 鮎美
柳笑

朝顔の鉢われたまゝ花開き 春柳
朝顔が小さく咲いた病上り 鮎美
朝顔へ起抜けた顔めつと出し 文蝶
朝顔の主が違つた相い佳び 紫香
席題「新参」 互選
新参はたばこを吸ふて疲れてゐる 小柳子
新参が手持無沙汰な目のやりば 春柳
新参も招待券の中に入れ 白柳子
新参のごつち付かすの返事をし 文蝶
新参へ社長マドロスくわへたま、すゝむ

東京支部句會(東京都)
六月廿六日 於島野寮

看板・予定・素肌・希望

看板は依託加工と書いておき 好郎
画伯たらん夢もはかなき看板屋 天三坊
看板を並べて出来たマーケツト 高志
用のない看板も読む待ちぼうけ 不二
予定なごするだけ損な昨日今日 同
妾宅に寄るは予定にない予定 好郎
結婚十年素肌見せるも遠慮せず 同
素肌にも自信があつて海にする 不二
樂里裏紫煙の中にうつく肌 登志
肺患の目にたくましい漁夫の肌 高志
何時消えた素肌の艶か女老ひ 守夫
「御希望通り」でアカハタ氣焔 天三坊
希望條件六分通りで嫁入りし 好郎
希望なき捨ててくつた安定所 高志
現実の前に希望も小さくなり 不二
希望まだ捨てず教会の隅にある 同

川柳雑誌 ウイロー社句會(ハワイ)
布支支部 六月二十六日 於商工會議所階上

打

里の母押し付けた仲を打診する 笑有
本端微塵打たれて生きた國さなり 長洲
神に祈る二死満蟻打つてくれ 潮風
肩も打ち腰もさすつて待つ保険 草一郎
打つために打たれた顔の若夫婦 樹水
睨んだり打つ真似たりめが手や 我樂多
打つために買つてる様な鯨尺 曉舟

お経まで打算亡者も浮はれず 快夢起
打てば響く才を買はれて閑居する 魔花麗
打ち込んで来いこ師範はヌツコ立ち 泉水
打ち解けて見れば今宵の月丸し 野渉
叱られた手に誤字を打ち誤字を打ち 亭駒
懐かしや戦後の母の手打ちそば 夢舟
そんなことすれば打つが打ちもせず 夢舟
鬱憤のやりば蛇など打つて見る 友郎
忘れてたこれはしたりと膝を打ち 盆丘

雑川 竹原支部句會 (廣島縣)

五月十六日 於 可笑居 柳慶報

友・恋・病院

その道の大家友人だけが知り 愛鳩
おぼさんの恋愛ばなし娘は笑ひ 同 笑
恋なんでおかしうつと女言ひ 同 笑
死ぬ程の恋して今は他人なり 同 笑
病院におしきりやうの付添婦 同 芳泉
一人ではどうも呑めぬ呼びに来る 同 芳泉
お互の破滅承知の上の恋 同 芳泉
病院で甘へたくせがまだ止まず 同 芳泉
跡始末友に頼んだ紙テープ 同 芳泉
治療費の苦面隣はばか声さなり 同 柳慶
友の死へつくづく酒が恐くなり 同 柳慶
悪友は昇給したを見逃がさず 同 柳慶

雑川 大牟田支部句會 (大牟田)

六月廿日 於三池染料管理課 富田一葉報

立腹・狸森・願

一週忌今日一日は怒るまい 抱逸
階級の相違立腹とりあわす 同 抱逸
むつとして坐ればよち／＼児が歩み 同 抱逸
はめられてゐる狸森のこそはよし 同 抱逸
お願ひの心馬居で整へる 同 抱逸
微酔ひ子供の願ひ聞いただけ 同 抱逸
俄雨角の喫茶は儲けてる 同 抱逸
俄雨忘れた傘が役に立ち 同 抱逸

雑川 日立櫻島支部句會 (大坂市)

蛙・川風・進水式・街・
ダンスホール 稻葉鳩花報

あひびきは蛙の音におごかされ 信二
川風に吹かれきれいなうそつき 紫雲
川風へひとりぼつちは犬をつれ 紫雲
川風をまともにうけて終電車 紫雲
進水式カメラも徐々に動くなり 紫雲
心まですくいて街に住み馴れる 紫雲
誘惑とは知らぬホルの灯が哀れ 紫雲
終曲へダンスホルの灯はうすく 紫雲

雑川 篠山支部句會 (兵庫縣)

六月 於 王地山大悲閣 小西無鬼報

鏡・煙草・晝寝・お経・麦刈り
罹災と見えぬ生活の立て鏡 凡志
幕合ひの鏡女に陳取られ 十字星
凸凹に写る鏡でがまんさせ 齊花
内職に氣兼ねながら一寸吸ひ 指花
僕もピース吉田さんでもピースなり 齊花
一人者の晝寝佗びよく蚊にくれ 牧乃
子供だけ起きておきます晝寝時 牧乃
晝寝にも入れ歯を外す老夫婦 指玉
分家して晝寝を長う休むなり 凡志
失業の晝寝と知らず羨まれ 凡志
子をとりし知らぬ経を眺めたり 凡志
本堂も山も静かに経を眺む 凡志
霧海の中からお経聞こえくる 齊花
今日生理休暇ですと麦を刈り 凡志
麦刈りの此処から集立つた集をみつ 凡志

裸・七夕・蛙・税金

戦災の裸共産党へ入り 無鬼
炎帝礼讃外山のシャツが足なり 無鬼
母親は七タだけに筆を持ち 同 無鬼
七タへ瓜も茄子も自家の出来 同 無鬼
七タへ母をのうたを書き 同 無鬼

半の露受けて七夕書き始め 齊花
雨上り蛙点呼の様に居る 無鬼
郵税が上りラブレターにもこたえ 牧野
生活の大半税がはをとり 〇子
ぼつ／＼と出来た貯金が税になり 〇子
お世辞な言ふても税金同じこと 〇子
嗜好品高い税に目をつむり 〇子
税金を見くらべてから怒り出し 〇子
税金を一日のばもて生き続け 〇子
隣まで税金の愚痴もつて行き 〇子
税金と闇のくらしへこの暑さ 〇子

雑川 久賀支部句會 (山口縣)

七月十六日 於 鈴蘭クラブ

夏夕・蟬・本当・時化・友・武者修業

ふるさとはい／＼なと思ふ夏の夕 路三
夏の夕サンマタイム九時が鳴り 路三
行水へ妻を投げつけてくれ 路三
スダレ越しの涼のこづつ二つあり 路三
陽にやけた余熱を踏んで散歩する 路三
子ばんのう蟬だと云へば蟬を捕り 路三
捕わねば蟬感情を動かさず 路三
庵主は不在しばら蟬をきき 路三
学修の子等へじやん／＼蟬がなき 路三
本当を言へば病人もうさとり 路三
本当が云へばうさとりない親父の眼 路三
本当云えば少々貸す氣あり 路三
眞実一路世間の隅に生き 路三
麻雀に腰落付けた時化もよう 路三
時化の日の竹の強なりうれり波 路三
大風一過もそばから時化のわび 路三
来客へ妻もそばから時化のわび 路三
風連へ体験が呼ぶ恐怖心 路三
忠告へ酒の力を借りて 路三
女難にもたえられぬ武者修業 路三
武者修業こらで女の悲鳴なり 路三
父に刃向けけし柳生の二蓋笠 路三
事なれ主義はわらんご銭を出し 路三
にせものにデパート出合う又右門 路三
吉川英治武蔵をまで歩かす氣 路三

阪田謄寫版

二五町田芝区北市阪大

会商田阪 株式會社

番九三六一 島福 話電

雑川 備前支部句會 (岡山縣)

七月二十三日 於久米雄居

引揚げ・首切り・やぶ医者・上機嫌

やぶ医者が一人で歩く夏の晝 五九童
首切りで無人電車をふつ飛ばし 運平
駄々つ子のように引揚げなつたら 一葉
やぶ医者と知り／＼この生活 同 一葉
永年勤続かんたんに誠首られて居 同 一葉
首切りでてんやわんやの世に変わ 同 一葉
切られた首だつたるか 同 一葉
引揚げの覚むれば見事に等しかり 同 一葉
温厚な人とはめられ首になり 同 一葉
上機嫌財布の紐をゆるめて出 同 一葉
病名をあつさりやぶ医云うてのり 同 一葉

雑川 出雲支部句會 (出雲市)

六月十七日 於大和紡出雲工場

愛人・梅雨・紙・廣告

ひとを愛し難きをまじした昨なり 虹路
入梅のさちの窓も閉めたまふ 虹路
南から引揚げ梅雨が珍らしい 虹路
手続にこの紙一枚五四です 虹路
愛人としらず仲人あたまなり 虹路
愛人が許さぬと言ふ眼でみつめ 虹路
梅雨ならば梅雨廣告の抜目なく 虹路

日ノ丸句會 (鳥取)

六月十日

別れ・産兒制限・辨當
うちなんか子供がなかりの別れや
お別れですともう一度顔を見た
美衣美食女心よきようなら
火のついたやうに産制言ひ出され
産制は人様のこゝ生んごきや
食ふてチョン毎日通ふ辨當箱
自轉車に辨當しつかり結びつけ
辨當の足しにとそつとパンを呉れ
あの映画観たわとあつさり拒絶され
生活むき僕とおんなじの映画
榮民雄夫

不朽洞会から

▼尼縁之助氏(出雲市)は全國市長會議に市長代理で上京、七月八日には皇居拜觀、天皇陛下に拜謁されたとの由で「二重橋しずりかえりさみだる」の句を寄せられた▼市場浸食子氏(大阪市)は七月三日、牛田晴夫氏と共に、東大に於ける藥學會に出席のため上京された。寸暇を得て西島○丸氏は訪問されたとのこと。學會後氏は日光、鎌倉、江の島へ廻られ九日に帰阪された▼湊田久米雄氏は岡山縣川柳四十五名の自選句集「吉備園子」を刊行された。一部五〇田送六田で頒布、希望者は岡山縣和氣郡吉永町同氏宛に▼西垣錦風氏(奈良縣)は八時出勤十一時まで勤務、それも大阪での勤務なので、時間が無いとか、でも「只今の小生の生命は川柳より外にない」と意氣込んでいられる▼長野井蛙氏(山口縣)は春頃から脇動脈硬化症で二ヶ月ほど休養さ

白鷺川柳會 (姫路)

五月八日

解決篇待たず(若かりき 芳道
映画もう四五年忘れてる夫婦 日満子
縁蔭・夜明
葛蒲池吟行
夷一笑報

日向は暑し縁蔭はちと涼しすぎ
縁蔭に氣の合ふ友と飲み語る
想ひ出の木蔭に今日も来てしま
縁蔭に子を眠らせて本を讀む
縁蔭で会つて煙草の火を分かち
三々五々縁蔭のもと晝休み
縁蔭の二人カメラに逃げ支度
樹市

れていたやうであるが早期診断のため目下は小康を得て出勤されている由▼安川久留美氏(金沢市)は奉以來入院生活を続けてゐられるが、もう退屈を感じられるほどで本号の句群にも参加された▼森下愛論氏(布施市)の令閨が長男(神戸市)は七月三日東京へ出張東大で開催された日本藥學會に出席された▼築山快夢起氏(ホノルル市)は路郎師の句評「靴の句に就て」をプリントしてハワイ支部會員に頒たれた▼五月号で報じた築山上院議長は快夢起氏ではなかった。同年にはあるが、全く縁故はない。二十年來の知己でよく間違はれるとのこと、一寸訂正しておく▼鈴木みきを氏(瀬戸市)は一身上の都合により七月限りで退会された▼古川慶花麗氏(ホノルル)のエヤメールによると、前山北海氏が七月廿二日出帆のゴードン号で再渡日されたとのこと、なほ小田沙兆氏經營の會社倉庫が丸焼いで、その倉庫を使用していた各會社の損害が全部で九十万ドル沙兆

縁蔭にヒンヤリとしてセルの肌
今日ひと日幸あれかしと夜明前
花賣子夜明けの町へ降りていく
空中に月をのこして明けかゝり
車窓ののくを眼で追ひて来る
凡夫

六月五日

樹市居

鯉のぼり泳がないのが氣に入ら
鯉のぼり水田の風に吹き返へり
鯉のぼり雪美
初王手浴衣の袖をまくりあげ
同

暑中御伺

川柳雜誌社

川柳不朽洞會

麻生路郎著 水武書房版



々噴評好

川柳を研究したい人にも指導する人にも好適の書
本書は著者が多年のウンチクを傾けて執筆しただけに川柳の新指導書としては唯一無二のものである。「川柳とはどんなものか」から説き起して收むところ三十七講、平明で親切で、初心者には本書を精くことによつて直ちに川柳作句のコツを全得することが出来る。多年川柳してゐる人たちにとつても又好参考書である。敢て一読を薦む。

B6版 二二二頁 定價 一〇〇円 送費 金四二円
取次御注文は 大阪市住吉區萬代通二丁目二五番地 川柳雜誌社
札幌市南區大坂七五〇五〇

▼「ニュースペーパー」はいろんな文字の省略をするが、へん風(へんふう)はいささか微苦笑(みくしょう)ものだ。そのへた(ほか)いふうがズツ(ずつ)かへ逃げ去る(さる)ところ、メツキリあつくなつた。あつくならないと、なげない話だが一般に句々(くく)がゆるむ。しかた夏には碧い海や泡の盛りあげがうた生ビール(なまびり)の魅力が生活を意義(いぎ)あらしめて呉れる。▼前号は汗だくで矢継早に出して好評だった。本号も燃えるような暑さの中で、編集した。▼句評「走馬燈」は例によつて福田山雨楼氏のアッセンで、今度は久留美、水車の阿氏(あし)氏が参加されたので顔振れが半ばかりかつた。亜鈍氏(あどんし)から、地元の大坂を一枚加えたらと云う意見が出てゐる。▼巻頭の評論「大問題小問題」は山雨楼氏の久しぶりの論草である。▼裏面に「放送された川柳村」を報じて、好評讀々(こうひやくぞく)だった前田 恆健氏は、「四國四縣川柳對抗放送」の稿を寄せられた。

▼富士野駿馬氏、阿達義雄氏等は例によつて研究物に健筆をふるわれ、安川久留美、清水白柳子、木下幽王氏等はその後の随想を發表されたので興味が深い。▼拙稿「瀾世放言」は持論の一端をヒレきしたので過ぎない。少しく詳論したいのであるが、紙面がゆるまないのので簡単に論じた。▼奈那がない市場カゴを提げて暑そうな顔でやつて来た。小猫がいるので、ごう

したん?と訊く。昨晚近所の子どもたちが、ぎこの猫だからんので産生さんとこの猫にしようと云つて、みんなと持つて来てくれたのだ。僕がラツキート呼ぶと、オヤ、梨里はマリヤと呼んでるし、お母ちゃんはコロと呼んでるし、みんな勝手に名をつけてるのネ。それは聞きはじめだ。それではみんなよせて、ラツキーコロマリヤとしても面白いなと思つた。ジャエグム／＼よりも短いから呼べぬDKMでもいい。へ颱風よりは氣が利いている。▼世間の金詰りがこたえたのか、あちこちの柳誌がベージを減らして値下げをはじめた。読者にとつて値下げは結構だがベージを減らしたので値下げにはならない。内容の貧困が目立つ位なものだ、ない袖は振れぬが、かも知れぬが、もう少し張つて欲しい。▼暑中廣告を浜山卓込んで下さつたことを感謝している。今後一層の御支援をお願いします。

▼本社七月例会は三日午後一時から大室文化会館で開催された▼大阪通信病院川柳会は七月九日午後二時から開催▼四局三社交通川柳大会は七月十日午後一時から境川の大阪交通局階上で開催、紋太、路郎両氏の柳歌があり、盛金だつた▼大阪警察病院英木分院川柳会が七月廿日午後一時から開催、路郎主幹の柳歌と句評があつた▼角一ゴム会社川柳会は七月十五日午後五時から同社の寮で開催された▼南区医師会文化部川柳会は七月十九日午後七時半から三友文化

館で開催▼南海鐵道川柳會では七月廿一日午後五時半から羽衣駅合宿所で開催▼南柳居小集が七月廿五日午後五時から開催、以上何れも路郎主幹出席▼川維東京支部會は七月 日島野宴で開催▼川維久賀支部は七月十日午後一時から日良居村土居鈴蘭クラブで夏季川柳大會を開催した▼川維篠山支部では七月廿三日開催▼高木震氏（東京都）は八月六日午後一時から台東区菊屋橋の不動院（角安坊）三回忌胡枝花七回忌追悼會を開催されるとのこと▼大洲納涼川柳會（愛媛縣）が植影氏等によつて八月七日鮎川上流の如法寺で開催される由▼花岡健堂追悼會川柳汐風納涼會（愛媛縣）が七月九日川柳會館で開催された▼黄瀬美秋氏（滋賀縣）は川維さつき金の

な扇子が飾られることになった。京都川柳ぐるうぶ作で、「生活にこのゆとりあり寄席の味（寸刀）」の句を揮毫、扇 製作者は五十年來京扇子の名工佐竹一泉氏、骨も同じく年來の竹工稻生竹雅氏である。流石に職災をまぬがれた京にはゆとりがある▼中村川路氏は福岡市新天町北通で喫茶と菓子の店を開き七月廿日に開店された▼阿部七を七月廿日に開店された▼阿部佐保蘭氏（東京都）は三月に古物商を廃業、七月一日から京染洗張呉服の店を開催された▼武藤奇智朗氏は大阪市生野区新今里町三丁目四で税務代理士を開催された▼高田穂次子氏（鳥取市）は健康を害されてゐたが七月下旬健康を取戻された由。

▼『川柳塔』への投句は不朽洞合員に限る。

B
 列5号
 每月一回一日発行

一册 金三〇四

半ヶ年概算	金一九八四
一ヶ年概算	金三九六四

昭和廿四年七月廿五日印刷
昭和廿四年八月一日發行

大阪市住吉區万代西五丁目二番地
編輯兼發行者 麻生幸二郎

發行所
川柳雜誌社

Made in occupied Japan

末と教養の殿堂

松坂文化クラブ

會員募集



松坂屋

大阪日本橋
電南一一七二番

課目

華道（小原流・末生流）
茶道（表千家流・宗徧流・花月庵流）

洋裁・書道・日本画

爭曲・醒樂

手函，古典，新學雨

手頭、古典、新舞踊

長唄・小唄・謡曲

服飾デザイン

詳細は問合せよ

七替文七クラブ事務所

一陽子行

10

公版

木坊屋

大阪日本

電南一一七二

1